

あの夏一番長い日

岡本卓也

人物

三宅悟（18）高校生 野球部員

三宅静子（80）三宅の祖母

野田康義（18）高校生 帰宅部

野田純子（40）野田の母

赤松千尋（18）高校生 帰宅部

西村忠（40）高校教師

村上竜司（18）高校生 野球部員

○松陽高校教室中

三十名程の男女学生が蒸し暑い教室内で騒いでいる。教室の一番後ろの右奥ではシャツのボタンを大きく開けた野田康義（18）が隣の席の生徒と大きな声で話している。野田の前では茶髪の赤松千尋（18）が化粧をしている。教卓の前の席では丸刈りの三宅悟（18）が熱心に西村忠（40）の話を聞いている。騒々しい教室内。

西村「おい、いい加減静かにせえ！」

静かになる教室内。野田は話し続ける
西村「おい、お前や、野田！」

それでも話をやめない野田。叫ぶ西村
西村「野田！」

正面を向き直り、椅子を後ろのロッカーに倒しながら、西村を睨む野田。一瞬野田を見て三宅。

三宅「先生、進めてください！」

三宅を睨む野田。正面に向き直る三宅

西村「明日の野球部の地区予選応援やけど、朝九時に直接美山球場に集合すること」

怠そうな声を上げる生徒達。

西村「三宅にとっては最後の夏やし、みんな

頑張って明日応援するさかいな」

化粧する手を止め急に千尋、

千尋「絶対勝つんやで、三宅！」

振り向き千尋を笑顔で見つめる三宅。

千尋「何笑つとんやおまえ。必死さが足りん

、必死さが。万年ベンチが、明日こそ試合

出てヒット打て！」

野田「どうせ今年も一回戦負けやろ。学校も

初戦観戦しかんと、次は観れへんって思

つとんやろな」

振り返り野田を睨む千尋。チャイムが

なり、生徒達が教室を出て行く。

○三宅自宅外観（朝）

一階建ての古い小さな木造一軒家。ユ

ニフォーム姿の三宅が玄関で素振りし

ている。三宅静子（80）が出てきて

静子「悟、ほら弁当と水筒」

そう言つて弁当と水筒を渡す静子。

静子「ほんまにこれが最後や、こない早起

きして弁当作らされるんも。あんた、野球

終わつたら私に孝行せなあかへんで」

三宅「おばあはん、今日試合こおへんの？」

静子「いくかいな。こんな暑い日に。おばあ

ちゃん殺す気か？」

三宅「でも、今日で最後かもしれへんで」

静子「そんな弱気やで勝たれへんねん。そも

そも試合出れんのかいあんた？」

三宅「最後やし、監督も出してくれるんちや

うやろか？」

静子「情けない、実力で出んかいな」

いらだつた表情で三宅、

三宅「わかつた、もうええわ」

静子「なんやその態度は。こんだけ3年間よ

うしたつた私にそんなんやつたら許さへん

で。弁当返せ、あほ」

突然弁当箱を地面に投げつける三宅。
静子「なにしとんやお前は！」

荷物を抱え自転車に乗って逃げる三宅

○野田家自宅外観（朝）

新しい二階建ての高級住宅。

○同中居間（朝）

たくさんのおかずが置かれたテーブル
で朝食をとっている野田。側では野田

純子（40）が弁当を用意している。

純子「やっちゃん、もう出えへんと。間に合
わんようなるよ、試合」

野田「うるさいな！、もう出るはほんなら」

カバンを手に玄関に向かう野田。

純子「やっちゃん、お弁当」

そう言ってお弁当と水筒を渡す純子。

弁当だけ受けており野田、

野田「水筒なんてええって。自販でアクエリ

アスとか買うわ」

純子「ええんか？今日暑うなるで」

野田「ええつて」

純子「お母さんも観にいこかな、試合」

野田「なんでやねん。関係あれへんやろ」

純子「関係あるやろ、息子の通う高校の野球部つてだけでも」

野田「アホか」

玄関の前の大きな庭に出る野田。

純子「やっちゃん、熱中症なったらあかんし、やっぱ水筒持っていきつて」

野田に水筒を持たそうとする純子。

野田「だからいらん言うとりやろ」

イラついた表情で水筒を玄関に投げつける野田。自転車に乗り出て行く。

○野球場

古びた市民球場。一塁席と三塁席の半

分くらいが応援の学生達と関係者の姿

で埋待っている。グラウンドは試合前の

ノック中。三塁側の観客席に腰掛けて

団扇を仰いでいる野田。その前では千尋がタオルで汗を拭いている。ライトに上がったフライを追いかける三宅。急に躓いて転びボールを取り損ねる。

野田「何であんなのも取れんのや」

千尋「目悪いんちゃう」

野田「違うわ、下手なだけや」

千尋「違う、あんたの目や」

千尋の方を振り返る野田。望遠鏡でグランドを見つめている千尋。

千尋「あのライトの村上、三宅が追いかける足元にボール転がしよった」

千尋から望遠鏡を受け取り覗いてライトを見つめる野田。三宅の後方でニヤニヤ笑っている村上竜司（18）。

千尋「野球経験のない監督、チームワークゼロのメンバー、選手のほとんどは喫煙者、万引きに陰湿ないじめまで。それがこのチームの実態や」

ぽかんとした顔で千尋を見つめる野田

野田「詳しいな、お前」

千尋「こう見えて、元野球部マネージャーです、わたし。三ヶ月で辞めたけど」

試合開始のサイレンが鳴る。

×××

スコアボードは十対〇で5回裏。三宅たちのチームの攻撃。

野田「この回点取れんかったらコールドか」

千尋「まだ終わってへん」

野田「いや、でももう無理やろ」

千尋「うるさい、応援する気ないなら帰れ」

真剣な顔でグラウンドを見つめる千尋

○ベンチ中

監督らしき男性△がグラウンドを見つ

めている。ベンチでは部員達がだるそ

うに腰掛けています。ベンチの前で一生

懸命素振りをしている三宅。バッター

ボックスから打者がベンチに帰ってく

る。アウトカウントのランプに二つ目

の赤が点灯する。監督の側の中年スタ
ッフが監督△に近づき何か呟く。

監督△「え、もうツーアウト？」
慌てた様子の監督△。そばで素振りを
している三宅が目に入る。

監督「三宅、代打、代打や」
三宅「はい！」

ヘルメットを被って駆け足で打席に向
かう三宅。ベンチの村上が声を上げる

村上「監督、俺試合まだ出てませんよ！」
監督「あれ、お前まだ出てなかったっけ」

三宅はやる気満々でネクストバッター
サークルで素振りしている。監督△が
グラウンドに出てきて、

監督「審判、代打は村上です」
村上が打席に向かう。呆然とする三宅

村上「おい早くベンチ戻れ。監督の指示や」
その様子を眺めている野田と千尋。

野田「何やあれ、三宅の代打ちやったんか」
千尋「あんた知らんのか？村上の親父は教育

委員会の副理事やで」

野田「そんな関係ないやろ、卑怯やんけ」

千尋「勘違いすんな、まだ試合は終わつたらへん。ほら、見てみ」

振り返りグラウンドを見つめる野田。バツターボックスの村上の背中にボールが当たり鈍い音がする。

審判「デッドボール」

そのまま動けずベンチに運ばれる村上三宅がヘルメットを被って出てくる。

立ち上がり大声で千尋、

千尋「三宅、死んでも打てー！」

若干躊躇しながら立ち上がる野田。気

力を振り絞って大きな声で応援を始め

る観客達。声は出さないが応援に合わ

せ必死でメガホンを叩く野田。急に天

気雨が降ってくる。火照ったグラウンド

の蜃気楼が見えなくなる。益々大きく

なる応援の声。構える三宅。ピッチャ

ーがボールを投げる。フルスイングす

る三宅。強烈な当たりが三遊間に飛ぶ

○球場入り口付近

入り口付近のホワイトボードに10対

0の文字が書かれる。小雨の中、野田

と千尋が観客席から出てくる。

野田「ヒットかと思ったんやけどな」

千尋「そうやな、でも、あいつにしてはいい

スイングやった」

二人の後方から三宅が道具を抱え外に

出てくる。すると突然傘をさした静子

が三宅の前に現れる。

三宅「試合来とつたんか、おばあはん」

静子「違う、今来たところ」

三宅「終わってもうたわ、最後の夏が」

静子「何しんみりしとんねん。最後に一打席

でも試合に出れたんや、良かったやんけ」

三宅「そうやな」

静子は手に持った傘と弁当を三宅に差

し出す。大事そうに受け取る三宅。